

11月27日（水）に開催された実践研究部会での活動を紹介します。

今回の参加者のみなさん

瀧田 健司先生（神沢中）、表 普一先生（東陵中）、岡崎 功典先生（千石小）
 濱地 光大先生（富士中）、丹羽 良平先生（当知中）、井上 将孝先生（笹島中）
 山下 剛史先生（沢上中）、佐藤 友哉先生（港北中）

全小理愛知大会（船方小）について

プレ大会が終わり、本番に向けて約1年となった全小理愛知大会に向けた取り組み、特に船方小の実践について岡崎功典先生（千石小）からお話をうかがいました。

船方小の主題「自ら問題を見付け、自分の力で、解決する船方っ子の育成」

- 「主体的で子ども中心の学び」「理科を学ぶ幸福感」を子どもの姿（「やりたい」「できる」「なるほど」と言っている、考えている子どもの姿）で示していきたい。
- 船方小学校では、課題に対して前向きに取り組む児童の姿が見られる反面、問題意識の高まりが十分でない状態もある。そこで、自身から生まれた疑問を解決していく過程で主体的に学ぶ力を育むことを目指す。
- 主題の「自ら問題を見付ける」とは、事物・現象との出会いから「なぜ」という気持ちを高め、「やりたい」と自ら問題を設定すること、「自分の力（で解決する）」とは、仲間との対話や試行錯誤を繰り返し、理科学習の8つの過程を通して自力解決できるようにすること、「解決する」ことで、「理科を学んで良かった」という幸福感を味わえると定義し、主題に迫るための取組を航海に例えている。
- 8つの学習過程が示され、自分の学習内容を記録していく「ステップ学習カード」を使う。そこには見通しをもち、チャレンジ・試行錯誤し、「なるほど」と納得しながら問題解決してく学習の足跡が蓄積され、次の問題解決の糧となることが期待されている。



【説明の様子】

秋の授業公開振り返り

10月25日（金）に佐藤友哉先生（港北中）が行った授業実践について、振り返りを行いました。佐藤先生、参加した先生方から、次のような意見が出ました。

- 自由進度学習を行い、生徒が課題に関わる質問してきたときには、グループの目的に迫れているかを考えさせた。
- 想定以上に生徒はパフォーマンス課題を解くことができた。
- ルーブリック＝教師が求める基準をきちんと示すことが大切である。
- 何をすべきか考えられない生徒には、環境を整えることは手伝うが、教師が教え過ぎず我慢することも大切である。
- 生徒の質問に対しては、自分で教科書やプリントを探そう指示した。周りの生徒もその様子を見て、自分で調べながら課題に取り組んでいた。
- 生徒は各自で時間や計画を変更するなど、自己調整している様子がよく見られた。
- 知識・技能、思考・判断・表現の観点について、どのように評価を取るべきかが難しかった。小テストを行うにも進度がばらばらなので取りにくい。
- 自由進度学習で何を目標としているか分からなかった。
- 生徒の評価が難しい。各観点を連動させて評価できているのか。知識の変容や表現の変容をどのように評価するのか。継続性をどのように評価するのか。